

韻鏡新解

後編

大島正健著

大島正健著

韻鏡新解

後編

韻鏡新解後編目次

第一章 開合對次の諸轉

一

第二章 輕重對次の諸轉

二三

第三章 唇牙喉の三音と舌齒半舌半齒の四音

三八

第四章 唇音の特質

四七

第五章 齒音の特質

六一

第六章

喉音の特質

七〇

第七章

泰夫發祭の四韻

八一

韻鏡新解後編

大島正健著

第一章 開合對次の諸轉

開合對次の諸轉と通覽するに、兩轉共に韻の全く同じき者あり、全く異なる者あり、又一部異にして、他の同じき者あり。左に其三類を列記す。

一、開合對次の韻の同じき諸轉

第九 第十	第六 第七	第四 第五
微	脂	支
尾	旨	紙
未	至	寘

第 三 十 六	第 三 十 五	第 三 十 四	第 三 十 三	第 三 十 二	第 三 十 一	第 三 十	第 二 十 九	第 二 十 八	第 二 十 七	第 十 六	第 十 五
耕 清 青	庚 清	唐 陽	麻	山 元 仙	佳	耿 靜 迥	梗 靜	蕩 養	馬	產 阮 獮	蟹
諍 勁 徑	敬 勁	宕 漾	禡	禡 願 線	泰 卦 祭	麥 昔 錫	陌 昔	鐸 藥	鐸 藥	鐸 藥	慶

二、開合對次の韻の同じからざる諸轉

第四十三	登
第四十二	蒸
	等
	拯
	嶝
	證
	德
	職

第一	冬	東
第二	鍾	
第十一	模	虞 魚
第十二	姥	麌 語
第十七	痕	臻 眞
第十八	魂	諄
第十九		
第二十	文	欣
第二十七	歌	
第二十八	戈	
第一	董	
第二	腫	
第十一	姥	麌 語
第十二	暮	御
第十七	恨	震
第十八	恩	稕
第十九		
第二十	問	炊
第二十七		
第二十八		
第一	沃	屋
第二	燭	
第十一		
第十二		
第十七	沒	櫛 質
第十八	術	
第十九		
第二十	物	迄
第二十七		
第二十八		

第三十九	覃咸鹽添	感謙琰忝	勘陷豔忝	合洽葉帖
第四十	談銜嚴鹽	敢檻嚴琰	闕鑑嚴鹽	盍狎業孽
第四十一	凡	范	梵	乏

三、開合對次の韻に異同ある諸轉

第十三	古音 齊	海琰 齊	代怪 祭 霽	夬
第十四	灰皆 齊	賄駭	隊怪 祭 霽	夬
第二十三	寒刪仙先	旱潜獮銑	翰諫線霰	曷黠薛屑
第二十四	桓刪仙先	緩潜獮銑	換諫線霰	未黠薛屑

第一類は對次の兩轉の諸韻、夫々其聲能く相調和し、開の方に合口の發聲を加ふれば、轉じて合口の韻と爲る者、且れば、開と合との關係自ら明かなり。

第二類は對次の兩轉の諸韻、夫々其聲の調和を缺き、其間に距離を生ずる者あり、又韻の相對せざる者もありて、説明を要すべき者あり。第十七、

第十八の入聲の扱は兩轉に跨る。

第三類は對次の兩轉の諸韻の差異只一等韻にのみ存する者なり。

開合兩轉の喻母の下、三等四等の窩中字の有無に付き、奇する事實あるは、前に既に示したる所なるが、今更に開合諸轉の特質を探るため、之を再説すべし。左に列記する所の者は開合對次の諸轉のみならず、總て喻母の下、三等四等に字を備ふる韻を有する諸轉なり。平上去入の三等四等の位置に、○を附したるは、字の存在を表はし、相當期待する場所の空位することあるも、其具韻に其字を備へざることを示すのみにて、音韻の配置には關係無きものとす。例へば第六轉開、上聲、四等、第十四轉合、平聲、上聲、三等の空位なるが如し。

平 上 去 入

第一		
開	○	三
	○	四
		三
		四
		三
		四
	○	三
	○	四

平 上 去 入

第二		
合		三
	○	四
		三
	○	四
		三
	○	四
		三
	○	四

第 二 十 六 開	第 二 十 五 開	第 二 十 三 開	第 二 十 一 開	第 十 七 開	第 十 五 開	第 十 一 開	第 八 開	第 六 開	第 四 開
	○	○							
○			○	○		○	○	○	○
○			○	○		○	○		○
○			○	○	○	○	○	○	○
			○						

第 二 十 四 合	第 二 十 二 合	第 二 十 合	第 十 八 合	第 十 六 合	第 十 四 合	第 十 二 合	第 十 合	第 七 合	第 五 合
○	○	○	○			○	○	○	○
	○		○			○		○	○
	○	○	○			○	○	○	○
	○		○			○		○	○
○	○	○			○	○	○	○	○
	○			○		○		○	○
	○	○	○						
	○		○						

第二十九開	第三十一開	第三十三開	第三十七開	第三十八開	第三十九開	第四十開	第四十二開
			○		○		
○	○	○	○	○		○	○
			○				
○	○	○	○			○	
			○	○			
○	○		○	○		○	○
				○	○		
	○	○		○		○	○

第三十二合	第三十四合	第四十三合
○	○	
	○	
○	○	
	○	
○		
	○	
○		○
	○	

石の諸轉と通覽するに、開轉の方にて喻母三等の箇中に、字の存在する者は、第一、第二十三、第二十五、第三十七、第三十八、第三十九の六轉のみにして、然かも具半は開合對次を爲さざる獨立轉なり。此の如く開轉の方には、三等は喻母の出現を避くる者多しと雖も、四等は皆字の現はれ得べき格なり。之に及して合轉の方は、喻母三等の箇中に字を備ふるを例と

す。之に従はざる者は只第二轉のみなり。第十六轉も缺位なれど、或は當
の字の存在せざることとなるべし。合轉の四等には、字の現はるゝも又現
はれざる者もれど、發音上別に故障無きものの如し。既に此の如き事實
ありとせば、是れ單に偶然の配置と見做し難かるべく、其間に發音上
の定則の存すべきことと承認せざるを得ず。故に縦例外あるにもせ
ふ。是を以て諸轉の開合を定むる一條件として取り扱ふに妨りあるべ
し。

さて三等は拗聲の韻にして、四等は直聲の韻なり。既に拗聲なる者に、喻
母のヲの加はるは、耳障りなるのみならず、不必要なれば、開轉三等の空
位と爲る理由を生ずることとなるべし。影母は喻母と其音相近けれど、か
ゝる故障なきものと見え、開轉の三等字は其位を占むることと得るな
り。合轉にて拗聲の韻に、合口音の加はるときは、之に喻母のヲを添ふる
も、發音に困難ならぬものと見え、三等字の出現を許すなり。四等は直聲

の韻なれば、之に喻母の^リを添ふるは、開轉にても合轉にても、其發音に故障を生ずることなく、故に四等字の其位に坐し得るは、當然の事なりとす。例外と爲るは此法則に従はずして、開轉喻母三等にて發音し得るものか、或は合轉喻母三等にて發音し得ざるものなり。

開合對次の第一類の兩々韻を同じうする諸轉に就いては別に説明の要無かるべし。

第二類の韻を異にする諸轉に關して、是より順次意見を述ぶべし。

第一轉は享祿本と「セ音略韻鑑」とに由りて開と定む。此轉の韻の聲にはウの聲あり、又現代支那諸州の音には多く *brun* の聲あり、更に又前母三等字の存在を見る、故に合と見る方至當なるが如し。若者は開轉説を維持せんがため、此轉は我漢音の如く、オウ (*ou*) の聲なるべしと斷じたることもありしか、今は此意見を撤回す。此轉の性質を知らんとせば、宜しく先づ第三十七轉の性質を吟味すべし。第三十七轉と第

一轉とは無尾韻と有尾韻との關係にして、一等韻の候厚候にこゝろを添ふれば、東量送の一等韻と爲り、ゐを添ふれば、屋の一等と爲り、二等三等、四等の韻尤、有、宥にゐを添ふれば、東量送の二等三等、四等の韻と爲り、ゐを添ふれば、屋の二等三等、四等の韻と爲るなり。第三十七轉を開と爲すに於いては諸本相一致す。發聲は之を令に作れど、固より採る可からず。第三十七轉既に開じれば、第一轉も亦是に従はざる可からず、第三十七轉の一等はオウ(ou)にして、二等以下はイウ(iu)なり。是れ開と見做すべき性質なるべし。されば第一轉の一等もオウ(ou)、ng、オウク(ouk)、二等以下もイウ(iu)、ng、イウク(iuk)の類にて、開の性質にてありたるものなるべし。我音にて入聲の菊きくをキクku、竹ちくをチクku、陸りくをリクkuと呼ぶが如きは、ウの音の存在するを略るべし。我假名にて漢字の入聲を記するに、母音のウは、其語尾ウを以て受り、母音のイは、其語尾キを以て受くると法とす。因りてキク、チク、リクの原音

はキウヲ、チウク、リウクにて更に尚皆拗聲する三等字なるが故、キエ
久チユク、リユクと響きたることなるべしと察せらる。又我假名にて
福。にフク、筑。にツク、宿。にスクを當つることあるを見て、此類にウの
音あると知るべし。此等も其原音はヒユク、チユク、シユクなるべし。但
し宿。は常呼シユクリれど、韻鏡にては四等字なればシウク又スクリ
るべし。

右の如く第一轉と第三十七轉との有尾韻無尾韻の關係より考ふる
ときは、第三十七轉の二等以下は(こ)の重母韻と爲るべきに由り、當
初内轉を分類するに當り、第三十七轉を第二類の中に置きしが、或は
之を第一類の方に移すこと適當なるべし。然るときは四等韻より幽
黝幼所屬の者を除く可きものとす。其説明は後に譲る。

第一轉と第三十七轉とにては、三等韻に喻母のりの重なりても、其發
音に故障無きものと見えたり。

厦門音には我漢音系の *ang, ok* の聲あり。福州音にも亦類似の聲あり。朝鮮音は *ang* は *ung* との聲より。されど是を以て第一轉を聞と定むるは、官話を基として之を合と定むると同じく、速斷の誤を免れざるべし。第一轉は「切韻指南」「康熙字典」の類合に作る。我國寛文本「訂正韻鏡」以後の諸本多く是に従ふ。後世の支那音は合に移りしもの、如し。今の官話にも翁と *ueng*、屋と *uuk* と呼ぶ記法を用ゐる者あり。

第二轉は享禄本開合に作れど「七音略韻鑑」に従ひて合と定む。此轉の聲は漢音讀にてオウ (*ang*)、オク (*ok*) と爲すべきか、或は吳音讀にてウ (*ung*)、ウク (*uk*) と爲すべきか、又或は第一轉に倣ひ、一等をオウ、オク他をウ、ウクと爲すべきか、疑問の起る所なり。喻母三等の空位なるは開の性質を示すもの、如し。然るに詳かに此轉の特質を考ふるに、拗聲の勢甚だ強きが如し。他轉に在りては影母の下の子、假名遣を分ち例へば於。はイヨ、オ、拗はイエウ、アウ、央。はイヤウ、アウと言ふが如く記

して、常呼には直音のオ、アウ、アウの方を用ゐれど、此轉にては、影母に
屬する[○]邕、[○]擁、[○]雍等は、常呼にては、拗音ヨウ（イヨウ）を用ゐて、直音のオウ
を用ゐることなし。沃[○]は影母一等直音の字にして、廣韻鳥韻切[○]りるが
故、當然イオク又ウオクなるべけれども、ヨク（イヨク）と呼ぶ。是れ當時
の原音を具儘寫したることなるべく、此轉にのみ限りたる我方の轉
化なりとは言ひ難かるべし。尤も沃は一等韻なれば、二等韻の拗聲な
るとは、異なりたる所ありたるものと推察す。現代支那音にては、沃は
拗聲に非ずして、しかも合口音にして、之を寫すに^と又^との羅馬
字を用ゐたる記法あり。第二轉は拗聲の強き韻と收め、其聲合口音に
聞こえたるに由り、此轉を合と定めたるものと判斷す。他の合轉と越
を異にする所あるが故、開合説などの出でたるも、理由無きに非ず。喻
母三等の空位たるは、拗聲の強き韻には、リを添ふる字無きが故たる
べし。此轉の入聲の三等字なる曲[○]、燭[○]、緑[○]には、キク、シク、リクの假名を用

ぬにるに見ず。是れ第一轉と大に異なる所なり。此轉の韻の喉音、牙音に井ヨウク井ヨウの假名を施したる例あり。是れ明かに合の記法おれど、未だ其の據りにる所を知らず。蓋し理由のありとることなるべし。

今此轉を我が常呼の漢音に基き、オウ (ou), ヨウ (you), オク (ok), ヨク (yk) の聲と爲す。現代支那音に於て第一、第二兩轉の別を立つる者少し。厦門音は漢音に類す。朝鮮音も亦然り。官話は *yang* の聲にして融庸共に *yung* 屋沃共に *yk* なり。尤も地方に従ひて其聲に多少の變化あり。

古韻の變遷と原ぬれば、東冬の兩韻の固定したるは六朝の中期以降にして、其初期には兩者混用の例多かりしと見る。我古音にて東の字も冬の字も共に均しくツの假名にて寫したるは其原音共に *tung* にて、今の官話と同聲なりしと察し得べし。第二轉の冬の韻の重龍の

類とチヨウ(Chong)リヨウ(Long)と漢音讀を用ゐずして、チユウ(Chung)リユウ(Lung)と吳音讀を與ふれば、冬の韻は東の韻と同聲と爲りて、六朝初期の音を表はすに似たり。

第一轉と第二轉との開合對次は、其韻の聲に間隔あるを示す。

第十一轉は享禄本既に之を開と爲し、後人異說多しと雖も、概して「切韻指南」に據りたるもの、如く見ゆ。今日は開轉說確定して、論議すべき所無し。

第十二轉は享禄本開合に作ると雖も、是も亦合轉說確定し、今更之と云爲すべきものに非ず。合口音至つて輕微なりとも、我古書に用ゐ來れる、喉音影母所屬の烏、匣母所屬の乎、其音シ(フ)なるを以て證と爲すべし。烏の字反切の音字として用ゐられにる場合、又他書に出でたる用法を見て、其開合につき、尚往々疑を挿む人あれど、當時の韻鏡の音は、我古書の音と系統を同じうにたる、合の聲とるべかりしこと明か

り。韻鏡の合口音に對する我假名の記法として、他の六音にては既に合口の發聲の力を失ふことありとするも、喉音にては尚其形を留むる者あるを常とす。例へば第十轉牙音三等の貴のク井はギと爲るも、喉音同等の尉の斗は變はらざるが如し。同理に、基き第十二轉喉音影母一等の鳥も匣母同等の乎も、共にラの假名として存するなり。官話にては鳥^ウを^ウにて寫す記法もあり。

第十一轉はオの聲なるに、第十二轉はウの聲勢を占むるが如し。其一等韻は輕きウの音を帶ふるオの聲なるが、第十一轉には之に對する一等韻なし。兩轉の韻の聲に、稍間隔ありと雖も、尚同合能く相對次す。喻母三等四等の關係も亦能く之を示す。

第十七轉は一等オヌ(one)他はイヌ(inu)入聲一等オツ(otsu)他はイツ(itsu)の聲にて、その開轉なること、疑を容るべき所なし。

第十八轉は第十七轉の開に對する合にして、兩轉に屬する諸韻は、古來

詩歌にて同用を爲し、後世に至り、開合相對する者、夫々合して同韻と爲れり。入聲の没の兩轉に跨れるを見て、兩轉の近親なるを知るに足るべし。一等韻は其響の強きに由り、開合の別明かなれば、痕、痕、痕のオヌと、之にウの音を添へたる魂、混、慙、カラヌと、韻の名稱を異にしにることなるべし。三等韻、四等韻は、イヌの聲にウの音を添ふるときは、*uen* の *un* に轉ずるか如く、ウメの聲と爲る傾向ある母音變化を生ずるが故、是亦兩轉の等韻に別名を附したるものと推斷す。開の眞軫震に對する、合の諄、準、厚、即ち是なり。

第十七轉の一等韻に屬する恩、根、痕はオヌ (*on*)、コヌ (*kon*)、コヌ (*kon*) と言ふ開の聲なるが、之に對する第十八轉の一等韻に屬する溫、昆、魂はラヌ (*uran*)、クラヌ (*kuran*)、クラヌ (*uran*) と言ふ合の聲と爲るべし。然るに我方にて、昆、魂はウ音を落として、開轉の字の如くコヌと呼ぶ。されど溫は尚ラヌと記す。是れ他例にて見るか如く、喉音の影母は、合口

の聲を留むるに由りてなり。官話にては過昆魂を令尚明かりる合口音にて *wan*, *huan*, *kuan* と唱ふる處あり。或は轉じて *uen*, *ken*, *hen* と呼ぶ處あれど、未だ過に附しにる心音を失はず、故に我方のシ又の假名の正當なるを知るべし。

第十七轉の平韻三等に屬するハ。眞。鄰。はキヌ (*hein*)、リヌ (*hin*) なり。之に對する第十八轉の平韻三等に屬する魔。諤。倫。はキユイヌ (*heuin*)、シユイヌ (*houin*)、リユイヌ (*huin*) なるべし。右は理論上の記法にして、實際はキヌ、シユヌ、リヌと呼び、官話にては之と

heiu, *chun*, *luu* と詠す。このユヌ (*iuu*)、ウヌ (*auu*) は合口音と爲りにるイヌ (*iu*) の變形なり。若し本來兩韻に共通しにるイヌの聲無かりしとせば、眞諤の兩韻の古來同用を爲し、又後世同韻と爲る道理あるべき筈なり。是に由りて、第十八轉の韻の聲の中には、第十七轉の韻の聲の隠れ居るを窺ふことを得べし。現代支那音にも折々此類

の合口音の中に、イヌの聲を現はす詁法あり均。を *heinn*、苟。を *heinn*。
勻を *gynn* と記するが如し。我方にても均。をキヌ、勻を井ヌ、椿。をナヌ。
倫。をリヌと爲すが如く、イヌの假名を以て其聲と爲し、合轉所屬の字
の音を表はすことあり。第十七、第十八の兩轉は、此の如く密接の關係
ありて、開合相對次す。喻母三等四等の字の配列も、亦能く兩轉開合の
別を示す。

第十九、第二十兩轉の開合の説明は、第十七、第十八兩轉の開合の説明と、
大要異なる所無きに由り、省略することゝすべし。第二十轉喉音曉母
去聲三等の訓。を庭。訓と讀むとき、キヌの聲あり。此字漢吳兩音ク又官
話 *heinn* なり。同喻母平聲三等の雲。を、漢音阿彌陀經にて井ヌと記す。
此字漢吳兩音ウ又官話 *gynn* なり。亦以て合口音の中に、イヌの聲の
潛み居るを悟るべし。

第二十七轉と第二十八轉とは、開合對次の轉なり。双方共に備ふる者は

一等韻のみなり。一等韻は其響強くして、開合の別明かにきこえたるなり。故に歌哥箇と文果過と、兩轉韻の名目を別にしたるものなるべし。

第三十九、第四十の兩轉は共に開轉なり。之に對して、第四十一の合轉を配せしめたるは、別に深き理由あるに非ず。第三十九、第四十の兩轉は悉く一、二、三、四の等韻を備ふるに、第四十一轉は僅かに三等韻のみを備ふるに由り、前者と後者と能く相對次するものとは言ひ難し。只開合同類の轉りるが故併置して形式を整へたるに過ぎざるものなるべし。

第三類は開合對次の諸轉の韻に異同あるものなり。
第十三轉は平聲咍皆○齊、上聲海駭○齊、去聲代怪祭霽にして開なり。之に對する、第十四轉は平聲灰皆○齊、上聲賄駭○の、去聲隊怪祭霽にして合なり。兩轉異りる所は、只一等韻の名稱なるのみ。先づ平韻を以て

考ふるに、開の方一等韻の咍はカイ (*hai*) にして、合の方一等韻の灰はクワイ (*kuai*) には、具差異明確にして、韻の別を爲す。然るに二等韻にては、開の方皆のキャイ (*hai*) に對する、合の方非は、理論上キエワイ (*kuai*) と爲すべし。然るに實際は下の音崩れて、微かに開合の別ありと言ふまでにして、確然として、此の如き聲を保ち難く、別韻と組成する力無きに似たり。官話にては、非は我漢音の如く、二等韻の特質なる拗聲を脱してクワイ (*kuai*) と爲り、一等韻との別を失ふ。上去二聲の韻も是に準じて説明を下すべし。三等韻、四等韻にも、開合別韻を設けざること、同様の解釋を與ふることと得べし。

第二十三轉は平聲寒刪仙先、上聲旱潸獮銑、去聲翰諫線霰、入聲曷黠薛屑にして開なり。之に對する第二十四轉は平聲桓刪仙先、上聲緩潸獮銑、去聲換諫線霰、入聲末黠薛屑にして合なり。開の方一等韻寒旱翰はアヌ (*an*)、曷はアツ (*at*) の聲にして、之に對する合の方一等韻桓緩換

はワヲ(wa), 末ロワツ(wat)の聲とれば、其差異明確にして韻の別を爲す。開の方二等韻剛潜諫は、ヤヲ(ya)一、點はヤツ(yat)の聲にして、之に對する合の方はウヤヲ(uwa), ウヤツ(uyat)の聲と爲るべきは、理論上の見解なり。然るに實際にては、二等韻は屢々幼聲を失ふ傾向ありて、一等韻の如く別韻を立つるまでに、開合の差明確ならず。三等韻、四等韻にも開合の差異あるは勿論なりと、別韻を採る程の異無きなり。例へば三等字、洞の方烈のしツ(let)に對する、合の方劣のレツ(luet), 四等字、開の方煙のエツ(en)に對する、合の方淵のエツ(euen)は、其聲各自韻を別にすべき程の差異に非ざるなり。他は是に準じて解すべし。

因に記す。第一類の如く開合兩轉同韻する者は、一等韻と缺如せる者か、或は又合の方一等韻の字數の少き者なり。

第二章 輕重對次の諸轉

輕重の稱呼は「七音略韻鑑」の用ゐる所なり。前に既に述べたるが如く、此書重中重、重中輕、輕中重、輕中輕の四目を設く。重中重と重中輕とは開に當り、輕中重と輕中輕とは合に當るなり。開合の別は既に説けり。重中重と重中輕即ち開の重輕と、又輕中重と輕中輕即ち合の重輕とは、各々其別何處にあるべきか、是れ研究を要する當面の問題なるが、學者の穿鑿本末之に及びたる者あるを聞かず。尤に愚見を發表す。輕重の名目は姑く借り用ゐることとす。

四十三轉を通覽するに、諸轉の平兩々相對し、其縁故の最も密接にして、而して其間の區別最も隱微なる者あり。第十三轉に對する第十五轉、第十四轉に對する第十六轉、第二十一轉に對する第二十三轉、第二十二轉に對する第二十四轉、第二十五轉に對する、第二十六轉、第三十三轉に對する第三十五轉、第三十四轉に對する第三十六轉、第三十九轉に對する

第四十轉是れなり。石の諸轉と輕重の別に由りて對照すべし。

第十三轉對第十五轉 重中重對重中輕

第十四轉對第十六轉 輕中重對輕中輕

第二十一轉對第二十三轉 重中輕對重中重

第二十二轉對第二十四轉 輕中輕對輕中重

第二十五轉對第二十六轉 重中重對重中輕

第三十三轉對第三十五轉 重中輕對重中重

第三十四轉對第三十六轉 輕中輕對輕中重

第三十九轉對第四十轉 重中重對重中輕

輕重對次の諸轉に共通する特價左の如し。

一、一韻にして相對する轉の一方にては二等、他方にては四等之位する

者あること。

二、右の場合には、其四等韻に對する同轉の三等韻は、全く舌、齒、半舌、半齒

の四音を缺くこと。但し第十五、第十六、第二十六の三轉には三等韻無し。

三、右の四等韻唇牙喉三音の下、廣韻口音韻、拗直混聲の憑音又憑韻の反切を用ゐるを常とすること。

四、右同韻の他轉の三等に位するとき唇舌牙齒喉半舌半齒の七音を具備するを常とすること。

五、右の場合には、之に接する四等韻唇牙喉三音の下、廣韻の反切は音韻直聲の音和正法を用ゐるを常とすること。

以上の如き法則ある者は、*ei* (エイ) *em* (エマ) *ae* (エウ) *eng* (エイ) *en* (エン) の如く、皆 *e* (エ) の母音を有する外轉の諸韻なりとす。

左に兩々互に韻故ある諸轉の、三等四等の兩韻を對照すべし。

第十三轉 重中重

○齊 ○薺 祭霽

第十四轉 輕中重

第十五轉 重中輕 ○ ○ ○ ○ 祭

第十六轉 輕中輕

第十三第十四兩轉の祭は唇音の外六音を具備す。

第二十一轉 重中輕 元仙 阮猶 願線 月薛

第二十二轉 輕中輕

第二十三轉 重中重 仙先 彌鉦 線霞

第二十四轉 輕中重

第二十一、第二十二兩轉の三等韻は舌齒半舌半齒の四音を缺く。

第二十三、第二十四兩轉の三等韻は七音を具備す。

第二十五轉 重中重 宵蕭 小篠 笑嘯

第二十六轉 重中輕 宵 小 笑

第二十五轉の三等韻は七音を具備す。

第三十三轉 重中輕

庚清 梗靜 敬勁 陌昔

第三十四轉 輕中輕

第三十五轉 重中重

清青 靜迥 勁徑 音錫

第三十六轉 輕中重

第三十三、第三十四兩轉の三等韻は舌、齒、半舌、半齒の四音を缺く。

第三十五、第三十六兩轉の三等韻は唇、牙、喉、半齒の四音を缺く。七音具備

の格に對しては例外なり。

第三十九轉 重中重 鹽添 琰忝 豔忝 葉帖

第四十轉 重中輕 嚴鹽 儼琰 豔豔 業葉

第三十九轉の三等韻は七音を具備す。

第四十轉の三等韻は唇、舌、齒、半舌、半齒の五音を缺く。

兩轉に跨る同韻の三等に位する諸轉の韻は其聲重く、その四等に位する諸轉の韻は其聲輕く、この輕重の二基として、兩者の別を設けたる。

ものなるべし。輕き四等韻の上に位する。輕き三等韻には力の弱き舌齒の音は伴ふこと能はざるに似たり。

是より對次の兩轉の三等韻、四等韻の性質を探るべし。

第十三、第十四の兩轉と、第十五、第十六兩轉との關係より説き起すべし。祭は元來拗韻なりしものなるべし。其の三等に位するとき、下の四等韻霽と拗直相對し、完備の形式を呈ふ。祭の中より直聲に轉せんとする傾向のありし者を取りて、他の對次の轉の四等に位せしめたるものゝ如し。故に其位に在る者、尚其痕跡を留め、廣韻には音韻拗直混聲の反切を示すことあり。

牙音 疑母 塾 魚祭切 音字拗 韻字直

喉音 喻母 曳 余制切 音字直 韻字拗

右は第十五轉の四等韻に屬する字なり。

第二十一、第二十二の兩轉と、第二十三、第二十四の兩轉とは、其差異を示

了こと更に明なり。

第二十三、第二十四兩轉の三等韻仙猶線薛は切聲其下に位する四等

韻先銑霰屑日直聲にして兩等の韻拗直相對し形式相整ふ。

第二十一、第二十二兩轉の三等韻元阮願月日其聲輕く響の銳き唇牙

喉の三音との結合に由りて其位を保つ仙猶線薛の直聲に轉せんと

する傾向ある者を取り出し、四等韻と爲して之に對せしむ。四等韻

の代表字を取りて、廣韻の反切と吟味すべし。

唇音	幫母				牙音	喉音
	幫母	教母	奉母	微母		
鞭	卑連切	篇	便	緜	見母	喻母
音字直	同	芳連切	房連切	武延切	甄	延
韻字拗	同	同	同	同	居延切	以然切
		拗	拗	拗	同	同
		同	同	同	拗	直
		拗	拗	直	同	同
					直	拗

右の如く三等韻より分れ出でたるものなるべしと思はるゝ四等韻
 に、拗聲を含める者多し。先就霰屑の韻に、此の如き例あるを見る
 こと稀なり。この音韻兩字直聲の反切の方は異別を省く。以下皆同じ。
 韻鏡と廣韻とは音と同一せざる者あるべしと雖も、聊か廣韻の之
 切の援助を借り、韻鏡に配置せる四等韻の性質を窺ふことを得べし。

第二十五轉と第二十六轉とは三等韻四等韻拗直の關係同様なり。

第二十五轉の三等韻宵小笑は拗聲にして、直聲の蕭篠嘯と其下の四
 等に位せしめて形式を整ふ。

第二十六轉に分れ出でて、四等韻と爲りたる宵小笑には、拗聲ある者
 多し。平韻の宵より例を出にして、廣韻の反切に徴す。

唇音			
奉母	敷母	非母	
敷	漂	飄	
符宵切	撫招切	甫遙切	
同	同	音字切	
同	同	韻字直	
直	切		

牙音		喉音	
明母	溪母	喻母	影母
螺	蹠	遙	婁
彌遙切	去遙切	餘昭切	於宵切
同	同	同	同
直	勑	直	勑
同	同	同	同
直	直	勑	直

第三十三、第三十四兩轉の三等韻、庚、梗、敬、陌と、第三十五、第三十六兩轉の清、靜、勁、昔と相對次了。

清、靜、勁、昔は三等韻、四等韻として、兩類に跨り、其の三等に在るときは、四等韻として青、迴、徑、錫と其下に位せしめて、勑直を對せしむ。

三等韻も、唇、牙、喉の音と、舌、齒、半舌の音とも有する者に分ち、第三十三、第三十四の兩轉と、第三十五、第三十六の兩轉とに分け屬せしむるは、一日其聲の軽く、一日其聲の重きを示す。清、靜、勁、昔の直聲に傾く者と移して、四等に位せしむること其關係他に同じ。其四等韻所屬の音

の廣韻の反切の例凡の如し。

唇音

非母	并	府盈切	音字切	韻字直
微母	石	武并切	同	同
			同	直

牙音

溪母	輕	去盈切	同	同
			同	直
羣母	頸	巨夜切	同	同
			同	直

喉音

喻母	嬰	於盈切	同	同
			同	直
盈	以成切	同	同	同
			同	直

第三十九轉と第四十轉との關係も其説明同様なり。

第三十九轉の三等韻鹽、琰、豔、業は拗聲、其下に連なる四等韻牙、祭、添、帖

は通聲にして、兩者能く相對次す。

第四十轉の嚴、儼、釅、業は牙喉の二音のみを併へ鹽、琰、豔、業の一部の變

調と境はせる者を取りて、其下に配せしむ。

以上に擧げたるは輕重對次の法則なり。發聲は最も杜撰なる書なり。此

書私意を以て、韻鏡の原本の配置を改め、兩轉に跨れる同韻を一方に後し、祭祭、仙仙、宵宵、清清、鹽鹽の如く、三等、四等を排列して、其形式を依りたるは、是れ却て韻鏡の原作者の苦心の秘訣を悟り得ざるものと謂ふべし。

前記の諸轉に類似する所あるを以て、更に内轉第三十七に就いて、聊か考慮を回らすべし。此轉の四等韻に、尤、有、宥と、幽、黝、幼との別あれど、韻鏡にては双方を併置せるが故、此別人をして往々判断に苦しむとむるこ
とあり。今細かに之を探れば、一般に齒音と喉音の喻母の下に字在る者
と、尤、有、宥に屬し、唇、牙、喉三音の下に字在る者は、幽、黝、幼に屬するを以
て、今則と爲るが如し。この幽、黝、幼の類の平韻の中より例を取りて、之を
黃韻の反切に徴するに、音字勑、韻字直の反切多きこと左の如し。

唇音	非母	彪	甫悉切	音字直	韻字直
一並母					
滂					
皮彪切					
同					
勑					
同					
直					

牙音

微母	見母	聲母	疑母
繆	繆	刺	聲
武彪切	居料切	梁逆切	語蚪切
同	同	同	同
初	初	初	初
同	同	同	同
直	直	直	直

溪母の下に喉あれど六聲の韻と一致り大喉は右、跟日切に属す。喉日或日三等字なるべし。跟日丘謬切にして音字初韻

字直り。

喉音

影母	曉母
幽	幽
於蚪切	香幽切
同	同
初	初
同	同
直	直

半舌音

來母
繆
力幽切
同
初
同
直

第三十七轉は重中重なり。幽、勦、幼は重中輕に属し、元來分れて別に一轉を作るべき格なれど三等に依りて之を幽、幼、勦の所屬の字少き故、尤、有、甯の中に籍を同じうしにるものなりとす。

第三十七轉の外、尚更に左の内轉所屬の諸轉に就いて査すべし。

第六轉

重中重

脂

旨

至

第七轉

輕中重

第九轉

重中輕

微

尾

未

第十轉

輕中輕

七音略韻鑑、享保齋刻本に、第九轉と重中重に作れるは誤歟なるべし。然るときは第十轉の輕中輕と相對次せず、第九、第十の内轉は、其配置、第六、第七の内轉と聯關して、輕重順序を爲すこと、各兩轉の單獨關係のみには非されはなり。

第六、第七兩轉の三等韻は七音を備へ、第九、第十兩轉の三等韻は舌齒、半舌、半齒の四音を缺く格より、因りて第六、第七の内轉と、第九、第十の内轉と、その異なる所は、主として輕重の聲に基く所なりと知るべし。

第十七轉 重中重 眞 軫 農 質

第十八轉 輕中重 諄 準 稕 術

第十九轉 重中輕 欣 隱 炊 迄

第二十轉 輕中輕 文 吻 問 物

身保本に第十八轉を輕中輕に作れるは誤寫なるべし。然るときは
第十七轉の重中重と相對次せず。其は其兩轉の單獨關係のみに非
ざるなり。其れのみならず第六第七兩轉の第十七第十八兩轉に對
し、第九第十兩轉の第十九第二十兩轉に對するは、無尾韻の有尾韻
に對する關係にして、共に夫々同性質の轉なり。無尾韻の第
七轉は輕中重なり、故に之に對する有尾韻の第十八轉も亦輕中重
なるを至當とす。同理に由りて、補に述べたる如く、無尾韻の第九
轉を重中輕に作るときは、之に對する有尾韻の第十九轉と能く相
一致することを得るなり。唐本「通志」中の「七音略韻鑑」も或は翻刻

本と同様の名目なりとしかと記憶す。さすれば是亦何れの時代よりか、傳はり來れる誤寫なりと斷じて憚る所無かるべし。

第十七、第十八兩轉の三等韻日七音を備へ、第十九、第二十兩轉の三等韻日舌齒、半舌、半齒の四音を缺く格なり。因りて第十七、第十八の兩轉と第十九、第二十の兩轉とは、その異なる所、主として輕重の聲に異く所よりと知るべし。

以上説き來りたる諸轉の輕重の別は、其内容を檢して窺ひ得たる所なり。遠く時代を隔て或は既に絶滅に歸したるべしと思はるゝ近代の音と如何にして還原し得べきか、只輕重の別ありたりと言ふ外、之を表はすに満足の記法無きを遺憾とす。

右兩々對次の諸轉につき、三等韻、四等韻の性質を探りて、その輕重の別を窺ひ得たり。之を基として、之と籍を同じうする對次の諸轉の一等韻、二等韻の間にも、同様の別ありたるべきことも推測すべし。

第三章 唇牙喉の二音と舌齒半舌半齒の四音

唇牙喉の三音と舌齒半舌半齒の四音と力門に強弱の差ありたるは、開轉令轉の諸韻の輕重の對次に關し、重の方三等四等にて音も偏ハ輕の方三等に唇牙喉の三音のみを稱じ、四等には其の直聲に傾く者を位せしむる法則あると以て、之を示したるが、尚他の場合に於いては具別を知り得べきことあり。

一、二等韻日韻鏡にては拗聲りるべきことを説けり、又其の我漢音の如く直聲に變ずる傾向あることを示せり。今眞韻を檢するに唇牙喉の音に属する字には、音字直韻字拗の反切の例多く、舌齒半舌半齒の音に属するには、其例稀にして、音字韻字共に拗聲りる音和法の例多し。

幫母 邦 博江切 音字直 韻字拗

唇音 滂母 胞 匹交切 同

並母 排 步皆切 同
明母 陌 莫白切 同

見母 江 古雙切 同

疑母 牙 五加切 同

溪母 曄 苦閑切 同

影母 隘 烏懈切 同

喉音

匣母 行 戸庚切 同

是れ唇牙喉三音の併ふ二等韻の、強くして直聲に傾くと以て、自ら直

聲の音字の反切を用ゐたるものりるべし、舌音の下にも音字直韻字

拗の類隔法を用ゐたる、左の如き例と見ること無きに非ざれど、寧ろ

例外と爲すべし。

端母 椿 都江切 音字直 韻字拗

舌音	端母	羣	都教切	同
	泥母	得	乃庚切	同
			同	同

二、舌、喉の三音は母音と詰りて、我國の假名にこれら三音の形を留むる力を示すことあれば、舌齒半舌半齒の四音は母音と詰ふとき其力弱きが故、風くより韻れて、古音の形を失ふに至れり。第八轉の牙音の下已とコ、暴コ、喉音の下意を不己をヨと讀むは古音なり。牙喉の音の方にては己暴をギ意已をイと呼ぶ。今音の如く舌齒半舌半齒の音の方にはその母音を留めずして、イの母音と爲す。常とす。古代にては治をト止をト志をソ望をロの假名に用ゐたる例あるを見れば、此類にもオの母音を留め居りたるを知るべし。第十九轉の牙音の下近をコ又乞をコツ、喉音の下隱をオメ、第十七轉の喉音の下乙をオツと呼ぶは、今音のキヌギツイヌイツに對しては古音なり。舌齒半舌半齒の方は、我假名風くよりイヌ、イツの聲にて寫す。第三十八轉の唇音の下品。

とホム、牙音の下、今とコム、喉音の下、音とオムと呼ぶは、今音のヒ、キ、ム、イムに對して、口古音なり。舌齒、半舌、半齒の音の方は、其響弱きが故、母音のオムの聲を留めずして、イムの聲にて寫す。入聲の古音オフの、今音イフと爲るも、平上、去三聲の上に現はるゝ音の關係と同様なり。從來我國にて、漠然として、オの母音の方を吳音、イの母音の方を漢音と稱し居れど、兩者同源より出てたる變遷の歴史を有し、後南北兩音に分れたるは事實なるが、オを吳音と唱ふれど、同韻に屬する者にして、イの母音の者も共存するは、統一を缺きて合理なりと謂ふべからず。韻は素より同性質の者なるべければ、其差異を音の性質に歸し、唇、牙、喉の強き音と結びたる者は、オの聲、舌齒、半舌、半齒の弱き者と結びたる者は、オの崩れてイの聲と爲りたる者として、説明を加ふること適當なるべし。唇、牙、喉の音の方の中にも、其古音を我假名にて寫したる者、皆悉くオの聲なりとは斷じ難く、イの聲を雜りて見ゆること

もあるなり。前例に出だしたる諸音は、漢音にては、以てより、七音の連なる者、共に均しく、イの聲と爲り居りたるものの如し。

又漢音、吳音の關係、上記の者と、女對する者あり。第四十二轉ハ職の韻を見るに、唇音の下通。ハ漢音フク(ヒヨクの轉)吳音シキ、牙音の下通。ハ漢音キヨク、吳音ゴク、喉音の下通。ハ漢音イヨク、吳音ハク、舌音の下通。ハ漢音チヨク、吳音ヂキ、齒音の下通。ハ漢音シヨク、吳音ジキ、半舌音の下通。ハ漢音リヨク、吳音リキにて、即ち漢音の方日、唇、舌、齒、半舌の六音に連なる者、皆オの聲なれど、吳音の方は、牙、喉二音に連なる者のみオの聲にして、唇音を始として、舌、齒、半舌の音に連なる者はイの聲なり。

三、合轉所屬の字に對する、我假名の用法を檢するに、牙、喉兩音の字は、舌、齒、半舌、半齒の四音と、其記法の同じからざる者多し。唇音は牙、喉の兩音と同類なれど、假名にては記法を異にし、牙音寫り *ka* *ken* はクワ又

喉音碗。の *wan* はフメと爲れど、唇音半。の *puan* はハメ、舌音端。の *uan*
 はタメ、齒音算。の *uan* はサメ、半舌音離。の *uan* はラメと訛し、牙音
 魁。の *kuai* はクワイ、喉音仄。の *kuai* はクワイと訛し、唇音杯。の
kuai はハイ、舌音韻。の *kuai* はタイ、齒音省。の *kuai* はリイ、半舌音
 雷。の *luai* はライと記するは、牙喉の兩音は強きが故、合口音の響と
 候てゐるに反し、唇音は特殊の音として姑く措き、舌、齒、半舌の三音は弱
 きが故に、我方にて開口音の如く聽きて寫し、するものなるべし。牙喉
 兩音の字にても、本來合口音の假名にて寫し、すると、後開口音の假名
 に改めらる者あり、源の假名ケエヌのケヌ化。の假名クエのケ貴。の假
 名ク井のキと爲れるが如し。最後は残り居りたる喉音の井、エ、ウの字
 音も、遂にハ音を失ひて、現代音の如くイ、エ、オに變り、采れるも、亦同
 様の例と見るべし。牙音、喉音も其下に采る母音の響弱きときは、亦合
 口音と失ふことあり。此の *kuai* はフメなるべきなり。又、*kuai* の *kuai*

口クラヌりるべきをコメム。この音を開口音にて表はしたる例もあり。

官話を参照するに、文張唇、元、京の音は強く、舌、齒、半、齒の音は弱く聞こゆるものと見え、同韻所屬の字にて、其記法を異にする者あり。溫、昏、昆、奔、門、尊、孫、敦、論は第十八韻の魂の韻に屬するものなり。同韻と云ふは *en* 又 *un* の類に分つは韻の本質より考ふれば不合理の誠を免れざるなり。溫、昏、昆、奔の方には *en* の聲と爲して *uen*, *huan*, *kuan*, *pan* に作り、門、尊、孫、敦、論の方には *un* の聲と爲して *mun*, *tun*, *sun*, *sun*, *turn*, *turn* に作るは、本来の韻の分別法に反すること明かなり。其實は同韻の中に、右の如き差異あるべき筈無し。是は現在音の事實を表はすに疑なきことなり。然し成り來れるは、之を子音の強弱に歸すること、道理に叶ふべし。唐代の音と我方にて寫したるものと思はるる。中心として、セ音の中唇、牙、喉の音は強きが故、之に惹かれて

one は *one* に移り、其合口音は *o* となり、舌齒、半舌、半齒の音は弱
きが故、之に誘はれて、*one* の合口音は *o* となり、其れより、又 *one*
に移りたるまゝにて、*o* と言ひ、*one* と呼ぶも、兩者其原音の間に
於いて、區別のありたるべきものに非ず。同類の唇音の奔。の *one* と變
ずるとき、門も *one* と轉じて、共に *o* の聲に移ることあり、此一事
亦以て其原音の異じらざりしと知ることを得べし。此の如くにして、
第十七轉の痕の韻と、第十八轉の魂の韻とは、同じ *o* の聲の上に立
てり、同用の韻なりしと知るべし。子音の強弱の、母音に及ぼせる、眞諄
兩韻の變化は、既に陳べたるが故、再び説かず。

第五合轉の支の韻に屬する、喉音の爲は *one*、第七合轉の脂の韻に屬
する牙音の爲は *one*、第十合轉の微の韻に屬する唇音の非は *one*
(*one*) と記するに對し、支の韻の齒音の隨は *one*、半舌音の隨は *one*
脂の韻の舌音の隨は *one*、半齒音の隨は *one* と記す。同韻所屬の者

にして、*hiei* の聲と *hiei* の聲とに分る、こと理に合はず、原音は然
 るべかりし若無し、我方にて寫し得たる片即ち *hiei* は是に近き音に
 てありたるなりるべし、唇、牙、喉の音は強きが故に、*hiei* は *hiei* に變じ、舌、
 齒、半舌、半齒の音は弱きが故に、*hiei* は流れて *hiei* に移りたるなり、原
 音に溯りて直音の者を取りて表はせば、唇、牙、喉の方曰 *hiei, hiei, hiei,*
hiei, hiei, hiei, 舌、齒、半舌、半齒の方は *hiei, hiei, hiei, hiei* の類と爲るべ
 し。我方にては此の強弱の音を寫したるとき、聴き取りたる儘にて、始
 めより記法の差異はありたるべきが、後世に至り、硬き方は却て合口
 の音を落とし、軟き方は之と存じ、同韻の中にて、イとウイとの兩聲あ
 るが如き疑を生ぜしむるに至れるなり。右の類に對する現代文押音
 と寫せる羅馬字は、官話と雖も、記法同じかりざるものあり。是は或は
 其の是りる所の方音の異なれんに、歸することなるべし、されど子
 音の強弱より起る、母音變化の説明に至りては、一貫して賢能く其場

合に通ずるを見るなり。鎌倉時代の假名遣の混亂せる以前迄は、喉音は他と違れて、和行音の假名を保ち來りたるは、既に他の合轉の下にて説きたるが如し。現代音にては合口音として、喉音日りのみ残り、牙音はクワも亦かに響かず地方多きに至れり。子音の強弱の母音に及ぼす變化の例は尚多けれど、煩を避りて省略す。

第四章 唇音の特質

唇音は諸韻と結ぶとき、他音と異りる特殊の作用を表はすことあり。之と列記すべし。

一、七音の中輕重の別ある者は、唇音、舌音、齒音の三種なり。而して舌音と齒音とは、等韻の上に確然たる別を立て、重の方、舌頭音の端、透、定、泥、齒頭音の精、清、從、心は、直聲する一等韻と四等韻との上に現れ、又齒頭音の邪は、四等韻の上のみに現れ、共に二等韻、三等韻の上に出づることなし、之に反して、輕の方、舌上音の知、徹、澄、娘、正、齒音の照、穿、寐、審、日

拗聲より二等韻と三等韻との上に現れ、又正齒音の禪は二等韻の上のみに現れ、共に一等韻、四等韻の上に出づること無し。舌音、齒音の輕重の別を生じたるは、此の舌齒兩音の拗聲の韻に接するとき、軟化せられて、重より輕に變じたるなり。牙喉兩音の如きは、かゝる場合には、居ゐ、丘こ、於お、計けの如き、本音に拗聲を加へたる者と以て、二等字、三等字に對する、反切の音字に作ることも多きを見て、其の軟化せられたるに非ざるより、別字母を用ゐざることを悟るべし。

唇音にも幫滂並明と非敷奉微との重輕の別あり。上は一等、四等の直聲の韻に接し、下は二等、三等の拗聲の韻に接するを以て、定則と爲せど、舌齒力音と異なりて、重の方には二等、三等にも現れ、得たり。而して輕の方は三等專屬にして、二等には上り得ず。故に唇音の拗聲に伴ふとき、必ずしも皆軟化して音と變じたるものと思ひ難く、又輕唇音と爲りたる者も、重唇音の拗聲に轉じたる者とも見做し難く、重と

輕と稍性質を異にする所ありて、羅馬字にては、重の方にならぬ輕の方にならぬを當つ。重唇音の拗聲を帶びて、二等、三等に現はれ得る二と、牙喉の音に類し、輕唇音の一等、四等の直聲の韻に伴ふこと能はざるは、舌齒の音と同様なり。

二、唇音の拗聲の韻に接するとき其拗聲は隠れて直聲の如く變ずる二とあり。左に二三の例を出す。

邦。排。包。巴。音は二等字なり。然るに支那音にては、*piang, pai, pau, pa,*

maang と言ひ、我假名にては、ハウ、ハイ、ハウ、ハ、マウと記し、拗聲の影と

留めずして、却て二等韻の果として拗聲なるか否かと疑はしむるこ

とあり。邦。は江切にして、音字は正聲のやとれど、韻字は拗聲の *ang* 有

り。排。は歩皆切にして、音字は *ai*、韻字は *ai*、包。は布交切にして、音字は

ai、韻字は *ai*、巴。は伯加切にして、音字は *ai*、韻字は *ai*、官。は武庚切にし

て音字は *ai*、韻字は *ai* なり。拗聲なる韻の聲は官話より取りたるなり

り。唐代の音も同様なりしや否や明かに知り難しと雖も、唇音は此初
聲を打ち消す力あるものと見る方説明に叶ふべし。

右の諸字に拗聲ありたるべきは、我假名にても之を示すことあり。包
を聲符とする。𪛗とヒヤウ(ヒヤクの轉)と呼ぶ。通例之をへウの假名と
爲せど、上記の方可なるべし。𪛗は𪛗の入聲なれば、𪛗にも、又之と同韻
の邦にも、拗聲のなりたるを悟るべし。吳音にて伯は入聲ヒヤク去聲
へなり。此のへはヒヤの轉なり。之に對する平聲の𪛗も、假名にては同
じく吳音へにて、漢音はハナレど、其原音は拗聲のヒヤなるべし。猛は
吳音にてミヤウと言ふ、拗聲の字なれば、其平聲に當る旨も、亦是に従
ふべき者とす。皆を官話に従ひて *piei* とせば、其假名はキヤイと爲

り。同韻の排は *Piac* 即ちピヤイと爲るべし。

重唇音の三等韻の(ㄷ)(ㄷ)と(ㄷ)(ㄷ)と接するとき、拗聲の存否は我音に

ては容易く判じ難し。輕唇音にては尚更に然りとす。

輕唇音の三等韻に接するとき、拗聲を聞き分け難き場合多し。官話に
 て風を *lung*, 方を *fang* と呼び、我假名にて風をフウ、方をハウと訛し、
 共に三等字特質の拗聲を認めず。風は方戒切にして、音字 *fang* 韻字 *lung*
 方。は符良切にして音字 *fang* 韻字 *lung* あり。反切の韻字の戒を *fang*, 其
 假名ジウウ、良を *lung*, 其假名リヤウと記する以上は風を *lung*, 其
 假名ヒユウ、方を *fang*, 其假名ヒヤウと爲しにるべき筈なり。かゝる
 拗聲は、彼方にても我方にても、耳障として嫌はれたるものと見えた
 り。されど重唇音の兵。明と吳音にて、ヒヤウミヤウと訛するを見れば、
 其原音は *hang*, *miang* なる可かりしこと疑無く、之を寫すにハ差支
 無かりしが如し。重の猛。はミヤウにて寫され、輕の方。はヒヤウの音を
 嫌はるゝに至れりといふも、今より見れば、奇なるが如く思はるれど、
 人に依り處に隨ひて好まれざる音あるは事實なり。尚古音の嫌はれ
 たるものか、或は方音の異なれるものか、現代音にては避けらるゝ者

あり。婦。日房久切なり。故に是に従へば *fun* にして、我假名ビウと爲るべし。然るに支那音にては *fun* と呼び、我方にては吳音讀にてフと記す。浮。員。阜。富。の類同一なり。謬。口武彪切なり。支那音にては唐代之古音と同じく *mun* と呼べど、我方にては此度日漢音讀にてベツと言へり。今の人口改めて多くビウと讀む。彪。も亦ヒウと言はずして、ハウと呼べり。ヒウは好まれざる音なりしと見ゆ。此字官話にては *fun* のあり。此外福。の音ヒユク。通。の音ヒヨク。の嫌はるゝが如き例尚多し。三。唇音の合轉に在る者現代音にては合口音を現はさざること多し。尤の例を参照すべし。

盤。瞬。日今音 *pan*, *man*, 其假名ハヌマヌにして、共に開合分ち難し。盤。は薄官切。瞬。は母官切にして、官に *man* 即ちクワヌの音ある上は、合の聲よりしこと論無し。今も *piant*, *muant* の記法無きに非ず。之に對する入聲の跋。末は *piak*, *muak*, 其假名バツマツリれど、これも、其

原音は *puat*, *muat* なるばかりしこと疑無し。

杯。は今音 *peu* にして、其假名ハイリれど、布四切とあるが故、*puat* 即ちプワイの音ありしを知らべし。

波。は *po* にして其假名ハハれど、博禾切とあるが故、ホの韻と *uwa* 即ちワの母音に還せば、*puwa* 即ちプワの音と爲るべし。

四合轉の二等韻、三等韻と結ぶとき、唇音の字は、合の聲も拗の聲も共に失ふことあり。左に數例を擧ぐ。

班。は支那音 *pan*。我音ハヌにして第二十四合轉の二等字なりれど、合も拗も今其痕跡なし。班。は布還切なり。反切の韻字の還。は *huan*。其假名クワヌれは班。は古へは *puan* の類にして、合の聲を保ちしこと明かり。第二十三開轉の剛。は *nam* なり。同類の二十一開轉の山。も同じく *shan* なり。山。と同韻の間。は *hiem* なり。 *hiem* は *hian* (*hiem*) の變形なるべし。還。は吳音にては還俗のゲヌなり。是ハ山。とセ又間。を

ケヌと呼ふは、シヤヌキマヌの轉むると同じく、還。のゲヌはギヤヌの轉むるべし。是ハ拗聲なり。還。は合轉所屬の字なれば、之にウの音を添ふれば、源。の古音とグエヌといふが如く、グヤヌ即ち羅馬字にて *guan* と爲るなり。此字運母の下に在るが故、*guan* と爲るべし。是より推して班。は *guan* の音なりしと察すべし。

班。と同轉の三等字なる變。は支那音 *pien*、我音ヘヌにて、是亦判斷と要する音なり。*pien* は拗聲の *pien* の變形するべし。變。は彼音切なり。眷。の今音は *pien* にて、合の聲なれば、變。の古音は *pien* 即ち *pien* の類なりしと知るべし。

第二十合轉の三等字の分。は支那音にては *fan* 又 *fen* と呼び、開合直拗共に疑問に屬す。此字我音フヌなり。分。は府云切なり。云。の今音 *yun* なるより推すときは、分。は我音の如く *fun* と爲りて、合の聲を表はす。同轉の同韻の字の君。に *fun*、薰。に *fun* の音あると見れば、分。に

him 即ち *him*

第十合轉の三等字たる未は支那音 *mei* 又 *mei* にして今來は輕唇音

mei 又 *mei* なり。我音は漢ビ吳ミなり。同韻の牙喉の所屬の字に貴の

mei 尉の *mei* の如く *mei* の聲ある者は合に屬するが故未も古音

は *mei* の原音 *mei* の如き音にてありたるなるべし。此字の初聲と
るべきは三等字なりと言ふより外に手掛りなし。

五、外轉の唇音は、重の方なるを常とすれど、其合轉の三等韻に、輕の方と
用ゐたる例あり、今其特徴を記すべし。

發は第十六外轉合の寄韻なり。外轉の三等韻と輕唇音と結ぶときは、
母音をして *e* (エ) の聲より *a* (ア) の聲に移らしめんとする奇なる現象
あり。發肺の *fei*, *fei* より *fai*, *fai* に移るか如し。喉音にも穢の音エ

のワイと屬り、牙音にも羗の音ケイのカイと屬る例無きに非ず。

第二十二外轉合の三等字を見るに、元の韻の煩は附袁切にして附は

輕唇音なり。此反切に由りて斷ずれば、煩。は *lren* にして、*l* の假名と爲るべし。然るに官話之を *lam* と呼び、漢音之をハヌと記す。月の韻の伐。も房越切にして、房。は輕唇音なり。は *lvet* 即ちベツの假名と爲るべきに、官話 *lofa*、常呼の漢音バツなり。吳音にては、煩。はボヌ伐。はボチなり。願。をグワヌ月。とグワツと言ふは漢音に似たりと雖も、是日吳音グラヌグワツの變形なり。朝鮮音は即ち此格にして、グの音を避けて、願。を(으)ラヌ月。と(으)ラルと言ふ。

第四十一外轉合の三等韻も、亦例外の輕唇音を備ふ。梵は官話 *lam*、漢音ハム、*h* は官話 *lah*、常呼の漢音バフなり。梵は扶迄なり。迄。を我。方にて常にヘムと呼ぶ。是に従へば梵は *sem* にて、其假名はベムと爲るべし。同韻に屬する牙音の劒。はケム、喉音の俺。はエムにして、共にエムの聲を有す。帆。もハム、法。もハフに作るは皆轉音なり。吳音にては梵。はホム、*h* はボフなり。朝鮮音 *h* 甘、*h* 甘にして吳音に類す。

右の三轉にては唇音三等韻の變化同様なり。外轉の韻は其響強く、合口音に伴ふ力の弱き輕唇音は其勢を止め難く、遂に三等韻をして、二等韻に引き上げらるゝが如き傾向を生ぜしめたるものとして、説明を下し置くべし。

六、唇音は他の六音と同じく、開轉と合轉との双方に存在し、他と同様の法則に従ふものなれば、唇音と結んで後發する音なればとて、之を必ずしも合口音なりと定めて、思ひ誤る可からず。支那の合口音といへるは、口内にて生ずる現象にて、直接に唇の運動に關係する音を指して言ふものに非ず。されども發音の位置の近きが故、唇音と合口音とは混じ易かりしものと見え、廣韻にて合と思はるゝ者の、韻鏡にて開と爲れる者あり、又是と反對なる者あり、更に又唇音の作用につき、判斷を要すべき者あり、拙者及切要略の一節を抄録して其例を示す。

韻鏡

廣韻

役。 *ric*

第六轉開 役爲切

傍。 *lang*

第三十一轉開 歩光切

内。 *heng*

第三十三轉開 兵永切

右の三字韻鏡にては何れも開まるが、唇音なるが故に、合の如く聞こ
えたるものと見えて、廣韻にて反切の韻字に用ゐたる爲、光、永は何れ
も合の聲なり。かゝる場合には、後世の反切の書にては、韻字の聲を取
らず、音字の音を主とし、憑切又憑音と名づけて、歸字の音を定むれど、
是れ只徒に圖式を作りて、之に合はせしめたるなり。實際は合として
取り扱はれたるに相違なし。韻鏡と廣韻と一致せざるのみ。

惟。 *sin*

第七轉合 洧悲切

洧。 *sin*

同 榮美切

此度は韻字悲、美は開なり、音字洧、榮は合なり。合口音の音字と、唇音
の韻字と重なりときは、互に相摩して、歸字は自ら合の聲と爲るなり、

之とも反切法にては、憑切又憑音と稱す。

ハ。 拔。

puat

第二十四轉合 傳拔切

puat

同

蒲八切

同轉入聲一等の跋は合するに由り、同類に屬する二等の拔も合するべきこと疑無し。然るときはハも亦反切の韻字に従つて合と爲るなり。音字の傳。蒲。共に唇音りれば、韻字と調和して合の聲を發すること自然なり。韻鏡の第二十三、第二十四開合兩轉に跨る韻の所屬の字に對し、廣韻の反切にては、このハの字を、双方の韻字として用ゐたる例あり。開の點は胡八切、合の滑は戸八切なるが如し。是は韻鏡と廣韻と一致せざる所あるか、或は唇音の響に緩みを與へて、用ゐたるものなりべし。

王。 獲。

puang

puang

第三十二轉合 兩万切

第三十六轉合 胡夢切

質韻の反切に用ゐたる韻字は何れも開あり。音字は合轉に屬せし
内字開の反切の音字として、屢々用ゐらるゝことあり。歸字は合する
こと明かりれど、其音は合の如くきこゆる。韻字の唇音の力に化せら
れて、生じたるものと見ることも可なるべし。

志。

ば

第五轉合

於避切

獲。

hauke

第三十二轉合

居縛切

廣韻の反切の音字韻字共に韻鏡にては開轉の字なり。然るときは志。
獲の兩字開と爲りて、廣韻と韻鏡と背反す。兩字合なるべきこと明か
りければ、是は唇音の韻字なる避縛の合の聲の如く聞こゆることある
に由り、音韻相摩するとき、其餘勢を歸字の方に移したるものと見て
説明すべし。

滿。

mitan

第三十四轉合

莫年切

慢。

man

同

謨年切

是亦廣韻の反切のみに徴しては、開合と判じ難し。吳も早も開の字なり。歸字は明かに合の字なり。謨は合の字なり。此類音字として開の方に用ゐられたる例多し。早は開の字なり。右の二例は前の例に反對にして、音字の唇音の合の如く聞ゆる聲に導かれて、音韻相摩して生ずる所の歸字の合と爲りたるを示す。

以上の諸例は往時自然の發音に基りて、反切を試みたるを示すものにして、後世人爲を以て製作せる韻圖に據りては、折々説明し難き場合起り來り、遂に煩雜なる門法を設くるに至れるなり。唐代の反切は、自然の發音を基として、説明を下すこと、却て正鵠を得るに近かるべし。

第五章 齒音の特質

韻鏡の圖上に載せたる、齒音の特殊なる配置は、人の注意する所なるべし。

一 等韻の直聲にして、二等韻の拗聲なることは、屢々繰り返して之を説きたり。内轉の韻にして、(イ)の聲を有する者は、一等に現はるれど、二等には其形を留めず。其は又那音にては、響の稍強きのは、拗聲に適合せざるものと見え、二等韻にては、唇、舌、牙、喉の諸音を引き着けて、拗化せしめ、音韻相結んで調和を保つこと能はず、随つて之に當つべき字の缺如して、空位と爲れることなるべし。

内轉の諸韻を通じて、齒音のみ二等に上るは、既に指摘したる所なるが、其齒音に特別なる摩撮力ありて、三等韻を引上げ、二等に其位を借り、遂に固定したる二等字を生ぜしめたるが如き觀あり。故に之を現代支那音に徴するに、齒音の下二等字と三等字と其音を異にし、三等字にては音韻兩者の拗聲能く和合し、儼然として其形を保ち居れど、二等字の大多數は、其本性を失ひて、或は全く直聲を有し、或は其母音を變じて三等字と系統を異にせんとするに至れり。然れども元來

同韻に屬する者多ければ、此の如く、唐代の古韻の法則に叶はざる現象を生ずるに至りたるは、一に後世の音變化に基く所なりと言はざるを得ず。

左に韻鏡の圖面にて、上下相連なる二等字と三等字とを取り出だし、官話に羅馬字を附して對照せしむ。

轉數

二等

三等

第一	崇	Long	〇	(chung)
第四	批	tai (?)	紙	chi
	釀	chi	施	chi
第六	師	chi	尸	chi
第七	衰	shuai	〇	(shui)
	留	tai	之	chi
第八	史	chi	始	chi

第十一

道 所

tau

so

道

暑

tau

shu

第十二

樹 鮐

tau

see (?)

朱

輸

shu

shu

第十七

臻 瑟

tsin

seh

真

失

chin

shih

第三十一

莊 霜

chung

shuang

章

商

chang

shang

第三十七

鄒 搜

tsau

see

周

收

chau

shiu

第三十八

簪 森

tsan

san

斟

深

chin

shin

第四十二

板

tsai (?)

職

shih

一色

nek

識

shiki

右の中二等字、三等字の音具記法同形なる者もあれど、多くは然らず。
或は三等の方の拗の *ん* と *ん* とに對して、二等の方にては、直の *ん*
と *ん* とを用ゐる者あり、或は三等の方の母音の *ん* に對して、二等の方
にては、其母音を *ん* 又 *ん* に變ずるが如き、母音變化もあれど、其原音の
然らざりしことは、唐韻廣韻の反切に徴して明かなるは、既に他の場
合にて説きたるが如し。 *ん* と *ん* とは直聲の齒頭音なれば、*ん* と *ん* と
との正齒音の位置に現はるべきものに非ず、元來齒音の *ん* は *ん* の
拗聲と爲りたるものなれば、*ん* として現はし、*ん* は *ん* の拗聲と爲りた
るものなれば、*ん* として表はすべきものなり。反切の韻字には三等字
を用ゐたるを見れば、本來母音を變更すべきものに非ず。されば形或
にては表はし難しと雖も、齒音の中に稍響の強き者ありて、其音を有
する者、他の三等字と其類を異にして存せし、韻鏡にては之を取り上

いて、二等に位せしめたるものと悟るべし。故に其性質外轉の二等韻とは同じかりず。外轉の二等韻は、一等韻と親しき關係を保ち、内轉の二等韻は、三等韻と深き縁故を有す。是れ其配列の起因を別にするが故なり。されど二等韻の其勢強く、初聲を脱せんとする傾向あるに於いては、内外の諸轉を通じて能く相一致す。

二、歯音の三等韻は、音韻双方の初聲、最も圓滑密接に兩々相結合し、當中の事整然として諸轉に其位を占め、全盛を極めたる觀あり。

三、四等韻に在りては、外轉の方は、齒音の表現、他音と異なる所を付け、
四等韻に在りては、特に説明を加ふべき者あり。

明轉の方にては、特に説明を加ふべき者あり。
其韻に^リ(オ、イ、ウ)の聲を有する諸轉にては、其響の弱き四等韻は、齒音と喉音、喻母の外、他音の出現を許さず。喻母四等字の存在は別問題と爲し、齒音の出現につき聊か考慮を要するべし。此件に就いては、前に既に述べたる所なり。と、事の順序に従ひ重複するが之を再記すべし。

し。

此類の弱母音は子音と結ぶ力無し。故に此等韻を組成すべき字存在せず。獨り齒音のみは、此母音を引き着くる力ありて、音韻結合の字其形を現はし、其位置を保つことを得るなり。第一、第二、第十一、第十二、第三十一、第四十二の諸轉は皆其現象を示す。第三十七轉は、其四等韻より、幽、黝、幼の韻を引き去るときは、此類の中に入るべし。第三十二轉と第四十三轉とは、四等字の姿を見ず。内轉の^ㄨ(イ)の聲を有する。第二十九轉と轉と第三十八轉と、外轉の、四等韻に^ㄨ(イ)の聲を有する。第二十九轉とは、四等韻に、齒音と共に喉音の^ㄨ母の、獨立して現はるゝ、所謂類に似たり。但し第三十八轉には、喉音に^ㄨ母の外^ㄨ母の現はるゝ、を見る。^ㄨ(イ)の聲を有する。内轉の四等韻には、齒音と共に喉音も現はれ得れど、齒音につと特に注意すべきは、^ㄨ母第六、第八の^ㄨ母の字に對して、之と寫せる羅馬字の記法

附する者もあり、左に註する如く、全く母音を扱きて表はす法あり。

第四轉の質。紫。積。に *た*、雌。此。刺。に *た*、新。徒。賜。に *た*、第六轉の皆。嬌。迄。に *た*、次。に *た*、私。死。四。に *た*、第八轉の茲。子。に *た*、思。似。寺。に *た*、の羅馬字を附す。是は母音弱くして、脱け落つるも、子音のみにて、其位を保つことを表はし、乃ち齒音の力の強さを示すに當るなり。此事實は齒音の強さを示す、證明として餘りあり。羅馬字の尾音の欠を取り、この母音を以て、之に代ふるも、此母音は輕微なる聲あるを示す、標註に過ぎざれば、又も用ゐたると異なる所無きものと知るべし。今來此位置は、この母音の存在すべき格なり。上記の如く、現代支那音に於いて、母音を落とすことあるは、他等の字にても見ることあり、と、四等韻にては、其現象最も顯著なり。

右の開轉に對する合轉に在りては、齒音の下母音の落つる記法を見

す。第五轉の齊。に *havi* の隨。に *aei*、第七轉の醉。に *havi*、翠に *havi* 綏。遂。に *aei* と當つるが如し。齒音の合口音と爲るときは自ら粘着力を増し、弱母音も止めて、之に伴はしめ、本韻の *o* とも響かせしむるに全れるなり。

第九、第十の開合兩轉、及び之と同性質なる、第十九、第二十の開合兩轉には、輕唇音の現はるゝ格にて、四等韻の弱 *o* がにめか、齒音も現出せざして、統べて空高なり。

朝鮮音にては、四等韻に對して特別の聲あり即ち質。咍。茲。と *aei* (*chae*) 此。次。と *aei* (*chae*)、斯。私。思。と *aei* (*chae*) と響かし、各自の音、皆 *o* (*a*) の聲と有することなり。然るに之に對する三等韻にては、支。脂。之。と *aei* (*chae*)、侈。鷄。虫。と *aei* (*chae*)、施。尸。詩。と *aei* (*chae*) と呼ぶが如く、各自此類の字の韻の本格なる *o* (*a*) の聲と有し、四等韻と相對次いて、其區別儼然たり。朝鮮音にては、*aei* の音と *aei* に近き音にて鷄。す。慣。例。を。れ。ば。太。の。如。く *chae, chae*

の聲ありとするも、必ずしも其原音を拗音なりとは斷じ難し。又朝鮮音にては、四等韻にり(ㄷ)の聲あるのみならず、三等韻の(ㄷ)の聲ある者の中に隔てて、二等韻にも師史士事と令(ㄴ)と讀むが如く、の聲の現はるゝことあるは、奇なる現象なりと謂ふべし。三等韻の朝鮮音は、諸國普通の聲なれど、二等韻と四等韻との方は、異様に聞こゆる聲なり。此處には唯其事實を記するまでにして、如何にして此の如き母音變化の生じ來りたるものか、其理由を詳かにせず。むも朝鮮音の輕き母音なるは、注意し置くべし。齒音は他音の現はれざる二等韻に上り、又四等韻に位を占むる力ある者なれば、此音の力の母音に變化を與へたるものなるべきは、考へ及ぶことを得べし。

第六章 喉音の特質

喉音の字母について、既に一應記載せしが、猶再考すべきこと多きが故、重複を省みず、左に之を列記す。

一、影母は何人も疑問を挿む所の字母なり。現代の支那音は裸母音にて之を表はし、子音と附ずるを見ず。然れども既に影母の名ありて、三十六字母の中に算へ入れらるゝ以上は子音の在りにあべき筈なり。又反切には影母を切字即ち音字として用ゐらるゝを見て、子音ありたりとせざれば、是れが説明を下し難し。然れども其由来に考ふるも、又實際に徴するも、未だ曾つて影母に子音の存在しにるべき證を見せず。或は支那音にては、影母は子音即ち *voiced consonant* として取り扱ふべきものに非ずして、母音を以て其儘字母に組み入れたるものなるべし。僅かに之を以て音字と見做すべき場合は、其の合口音と爲るとき、之に對して *u* 又 *o* を以て表はすことなり。此篇にては反切の切字即ち音字開口音なるときは、影母に對する羅馬字の位置を空位と爲せり。

二、曉母は今に於て寫す。古へも斯く在りたるなるべし。其方に於ては此音

無かりしに由り、之に對して加行音の假名を用ゐることとせり。

三、匣母は濁に依れり。聲帶の強き振動に由りて生ずる音なるべし。今音にては多く見にて寫す。曉母に比して、或は強弱の差異あることと見るべし。或は又母音の出氣音の如く聞こゆることありと見え、又、*ㄒ*、*ㄓ*、*ㄔ*の前に符號を附し、*ㄒ*、*ㄓ*、*ㄔ*の形にて表はす法あり。匣母の字母たるべき性質に關しては、其説明總べて影母に準ず。我方にては匣母に對して、開轉の方は、漢音吳音濁の加行音を用ゐ、合轉の方は、之に加へて、時に和行の假名を用ゐるを通則と爲せど、常呼の讀方及び記法には、様々變化あり、左に其例を出さず。

降 漢カウ、吳ゴウ 漢吳兩用。

項、巷 同 漢常呼。

學 漢カク、吳ゴク 常呼ガク。

胡 漢コ、吳ゴ 漢吳兩用。

戸

同

漢常呼。

護

同

吳常呼。

孩亥

漢カイ、吳ガイ

吳常呼。

諧

漢カイ、吳カイ

漢常呼。

駭

同

吳常呼。

械

同

漢常呼。

害

同

吳常呼。

痕狠恨

漢コ又吳ゴ又

漢常呼。

閑

漢カ又吳ケ又

漢常呼。

限

同

吳常呼。

緩

漢ク又吳ケ又

漢常呼。

幻

同

吳常呼。

寒旱翰

漢カ又吳ガ又

漢常呼。

何、荷

漢カ、吳ガ

漢常呼。

賀

漢カ、吳ガ

吳常呼。

避、暇

漢カ、吳ケ

漢常呼。

航

漢カウ、吳ガウ

漢常呼。

幸

漢カウ、吳ギヤウ

漢常呼。

行

漢カウ、吳ギヤウ

漢吳兩用。

候、厚、候

漢コウ、吳グ

漢常呼。

咸、陷

漢カム、吳ガム

漢常呼。

恻

漢ケフ、吳ゲフ

漢常呼。

此の如く不規則なる記法の出で来りしは、主として匣母の原音の聽

き取り難き所ありたるに基く所なるべし。

會。の漢クワイ、吳ヱ、黃。の漢クワウ、吳ワウの如く、漢の加行音に對し、吳

の和行音を用ゐたる者は、概して漢吳兩音の假名並び行はる。

韻鏡にて連母と濁に作り、我吳音も亦之と濁と爲す者多きに、其濁の性質兩者異なる所あるに似たり。と先づ大體の上に於いて相叶ふものとす。

連母は其發聲硬きものと見えて、一等、二等の力強き韻とは結合すれど、三等の滑かざる韻とは相調和せざるものか、其等には現出せず、又四等に於いては、内轉の弱き韻とは組み合ふこと稀にして、外轉の諸韻に伴ひて存在す。

四、喻母はリにて表はす所の軟き音なり。此の軟き音は、勢の強き一等韻、二等韻と結ぶこと困難なるものと見え、一等には稀に見ゆれど、二等には出づることなし。三等に喻母の出現の有無と、開合對次の諸轉との關係は、前に既に詳論せり。内轉の四等韻の弱母音に對して、齒音と共に、喻母のみ現はるゝことあるは、既に屢々之を説きたり。外轉の諸韻にても、此字母の、他と離れて、四等に其位を保ち居ることあり。是れ

喻母は開合兩轉を問はず、今來り即ち我方にて也行の音なるべかり
 しこと論を要せず。然るに合轉の三等字にては、今は其音の隠れて見
 えざる者あり。故に之を誤解して、喻母三等の、和行音說より出で來
 れることあり。現代支那音にても、爲。位。胃。衛。王。往。と唱
 ふるは、*y*の音を示さず。雖も、是は全く脱け落ちたるなり。他の場合
 に於いては、*y*の音の現存する者其例を擧ぐるに遑あらず。即ち遠。環。
 と *quien*, 營。永。と *queng*, 靈。韻。と *quien*, 越。と *quich*, 域。と *quich* と呼ぶが如
 し。我方にては、この也行音と合口音と重なるとき、上の方軽く、下の方
 重く聞こえたるものと見え、也行音を落として、和行音を替り、遠。環。も
 エ又、營。永。とエイ。靈。もウ又、韻。を井又、越。もエツ。域。と井キの假名にて寫
 したるが如し。然らば、喻母和行音說は、原音に非ずして、和音にのみ當

てたるものなるべきか。然らば亦開轉三等の滿。炎をエ又。鴉とエウ。尤。
と升ウ。暉とエウ。圍。と升クなど。と書くべき次第あるべきか。是れ明か
に誤謬なり。上例の中、廣韻の反切に炎の干廉切。鴉の干嬌切。圍の干六
切の如く、切字即ち音字に干の字を用ゐたるあり。干の字和行音なり
との説あれど、也行合口音なるべきことを忘る可からず。官話にては
之を *yan* と訛して、ユウーの如く響かす。干を純粹の和行音なりと斷
ずるときは、之を音字として用ゐたる古書の反切に大混雜を生ずる
ことあるに至るべし。前例の如く、廣韻の反切に開轉の字に對して、干
の字を用ゐたるは、其の干の音のみを取りたるなり。
支那の學者にも、喻干の兩字母を用ゐる者あれど、其日他音に輕重の
別あるものの存するが如く、此喉音の下に、稍異なれるが如く、きこゆ
る、二様の音の生ずるに由りて、喻母に干母を加へたるなり。三等の拗
韻に接する者と干母、四等の直音に接する者と喻母と定めたるにて、

于の我方の如き、和行音なるに由りて然るに非ず。唐代音を基とする韻鏡の説明には、于母と設くる要無し。

喻母と四等韻と能く調和を保つは、前に言へるが如し。合轉所屬の字にて、三等の方にては拗聲に文へられ、和行音強きがため、也行音落ちて和行の假名を用ゐ、四等の方にては、直聲の韻なるが故、合口音は也行音と相摩して其力を保ち難く、遂に脱け落ちて、也行の假名のみを用ゐることあるは、亦既に示したる所なり。喻母の拗聲は三等韻と結ぶときは、双方の關係の間に合口音を保ち、直聲の四等韻に接するときは、也行音確かに聞こえ、合口音は微かとなりて、打ち消されたる有様と爲り、我方にて開口音の如く聽き取り、也行の假名を以て之を寫したるより、此説明、喻母のみに適用せらるれど、他の喉音は場合同じからず。第十四轉匣母の惠の漢音は原音クエイなり。此字の吳音は、其假名和行の工なり。影母所屬の字も、其響輕しと雖も、亦工の假名

を以て訛すべし。白井寛蔭氏の音韻假字用例に、合轉の影母所屬の四等字にも、也行のエを用ゐたるは、太田氏の四等即行定母の説に誤られたるものなりべし。即ち第十四轉の娃。をエイ、第二十二轉の娟。悄。嫺。をエヌ、缺。をエツ、第三十四轉の營。瑩。をエイと記せる不如し。これ皆和行のエの假名なるを正しとす。本居氏の假字用格に淵とエヌの中に入れたるは可なりと、娟。をエヌの中に入れたるは當らむ。第三十六轉影母四等に屬する藝。を、廣東音にては *erung* と呼ぶ、梗母にも此字あれど、その合口音異なること同じ。亦以て喻母以外の喉音の四等字は、合口音を失はざるも證するに足る。

合轉の三等の拗聲の韻と、四等の直聲の韻とに、喻母の接するるとき、我假名にては、三等の方也行音を略とし、四等の方之を留むるは、稍奇異に思はるゝ所あれど、事實としては疑ふべき所に非ず。常に合轉のみに限らず、開轉にても亦同様の現象を見ることあり。第三十一轉にては、

1.

四等韻

2. 3. 1.

200

—

三

21

117

由 9

1

とに兩者共に漢音イウより。然るに漢音にては、フイ

又第一轉にては三等韻 *ikwang* 四等韻 *wang* にて

なり。我假名にしては、兩者共に漢音ユウ字の音に準ずる。

雄は才、融はユナリ。此の如く吳音にて三等字は

るに、四等字は之を保てゐれば、音變化の説明も要する所なき。

無し。支那音にても、時に「イ」の音の消え去ることを「イ」とし、分けて「イ」の音の

聲に接するとき、互に打ち消して其聲を全く消す。

く詰まりたる音にて付直聲の如くさし、調和を成し、支障なく論

り。又喻母の直聲に接するときは、即ち我假名造なり。合轉に

の現にれたる夏、其儘之と書

は、三等韻にて喻母と牀母

明白に留めたるを

なる假名遣に適用するものにして、原音に對して試みたるものに非ず。

牙音と喉音とは屢々相往來せり。支那近代の學者牙音の名稱を發して、之と淺喉音と呼び、之に對して從來の喉音を深喉音と唱ふ。

第七章 泰夫廢祭の四韻

張麟之が「指微韻鑑」を基礎とせる享祿本には、廢の韻を去聲の寄韻として、之と第九、第十の微尾末の韻の下に置けり。第九、第十の兩轉は内轉に屬す。然るに發は其性質外轉に屬すべき韻なり。故に其配置に就いては、久しく疑を抱き居りたる所なり。後鄭熊が「七音略韻鑑」に接し、廢の韻が第十五、第十六の兩轉の去聲の寄韻として、三等韻に置かれたるを見て、大に満足を覺えたり。第十五、第十六の兩轉は外轉に屬す。韻を列記したる廢韻の順序に由るも、廢の韻を末の韻の次とらずして、代の韻の後と置けり。

次に夫の韻を去聲の奇韻として、之を第十三、第十四の兩轉の二等韻に置けり。是れ一應當然の位置なるべしと考へらる。然るに共に同轉の三聲として取り扱はれ居れど、怪の韻と夫の韻とは其縁故稍遠し。唐代夫發の兩韻に屬せし字は、同代泰祭の兩韻に屬せし字と共に、漢魏の時代にては、一韻にして往來せし者なり。泰の韻も隊の韻に稍遠く、祭の韻も齊の韻に稍遠し。卦は泰の一等韻に對する二等韻なれど、其性質同じからず。具韻の本韻より察すれば、泰の韻も祭の韻も、共に奇韻として取り扱ふべきものにして、去聲の位置に空位なればして、其中に配置すべきものに非ず。泰、夫發祭は系統上密接なる關係を保てる韻なり。頭鏡の原作者の用意を云ふるは、事甚だ潜越なるに似たり。此等の諸韻に對しては、去聲の韻として別轉を設けて、配置すること至當なるべしと思考す。今韻にては四韻各自關係を異にし、泰は獨立し、夫は卦に入り、廢は隊に入り、祭は齊に入る。

左の一詩の韻脚は後世泰夫廢祭の四韻に分け入るべき者の、漢代の古韻に在りては一韻たりし用例を示す。

蔡琰悲憤詩

邁會敗外芥蓋吹肺逝大賴勸廢歲押韻

有韻會外蓋大賴ト泰邁敗ト日夫芥吹ト肺廢ト日廢逝ト勸歲ト日祭

諧聲字の組立も亦右四韻の關係を示す

泰 夫

廢

祭

滅

職

歲

害

寤

夬

袂

沛

肺

謁

竭

次に考ふべきは等位の順序なり。元來泰と夫とは同韻なりしと、漢聲の

方と泰、拗聲の方と夬と爲して兩韻に分ち、韻鏡にては泰を一等に夬を二等に置くこと既定の順序なり。發を三等に置くこと稍疑問に屬す。我が常呼の如く廢をハイと讀みて、此韻にアイの聲を附し、又今韻の如く之と隊の韻と合せとむるに至りては、三等韻と見做すこと能はざるべし。泰夬の韻はアイの類の聲なるべかりしが、是より分離したる廢祭の韻はエイの類の聲なるべかりしが如し。更に發の韻とつき所見を述べし。

「指微韻鑑」にて發の韻を第九第十の兩轉の中に置くは其本質にも叶はず。又唐代の音にも合はざるが如しと雖も、是は誤記にては非ざるべし。切韻指掌にて眞廢祭未至審を同一の場所に收めたるを見れば、其時代には既に廢と未と近き所ありたるものなるべく發と未の下に置きて、寄韻と爲さしめたるは、是れ全く當時の宋音に基きて、韻鏡の配置を改めたるものとして説明することを得べし。廢の韻には被の如く物の韻

にも通ひ又弗。の礪。市の肺。に對するか如く其聲符の物の韻に入る者もあり。物は古韻にては未の入聲なりは、是亦廢の未と縁故ありたるを示すものなり。現代支那音にて廢と *ふい*、未と *ふい* と響かすも、同様の關係を表けすものゝ如し。

然れども廢と未とは、元來韻の變遷其來歴を異とし、未は内轉の韻なるに、廢は祭と親近なる外轉の韻なり。『七音略韻鑑』の配置は實に其當を得たるものにして、韻鏡の原本の形を窺ひ得べし。廣韻を見るに、廢は丘吹切縁は呼吹切にして、反切の韻字の吹は、廢の韻なるに、兩字共に祭の韻に收めたるは、廢祭の兩韻の相近かりしを知るに足るべし。南宋の平水韻にては、廢は隊祭は霽に合するを見れば、此時代には、廢と祭と全く分れてゐるものと察せらる。我方にても廢の韻をアイとエとの兩聲にて表はす、即ち穢にワイとエとの假名を附するが如し。エの方は古音なり。漢音にて吠をベイと呼ぶも、韻鏡が三等韻に叶ふものなり。唇舌にて發

と云ふ、穢と云ふと記するも、遙かに之に應ずるものと見るべし。

更に翻つて再び漢魏の古韻を考査するに、去聲の泰、夫廢祭と、入聲の也、末、鑑、點、月、解の原韻とは、屢々往來する例あり、尤に其押韻につき、二三の例の韻脚と擧げて唐韻と比較すべし。

世園西都賦

廣。蠶。織。蹶。折。喚。殺。押。韻。 織。は。廢。 廣。喚。は。祭。 蹶。は。去。 殺。は。點。 折。は。

日鮮。

曹植七啓

施。過。沫。蓋。外。押。韻。 施。蓋。外。は。泰。 過。は。夫。 沫。は。末。 世。月。契。外。押。韻。 外。は。泰。 世。は。祭。 契。は。寢。 月。は。月。

同 王仲宣諫

又。聞。帶。 帶。は。泰。 又。は。廢。 聞。は。去。

晉人の作にも、尚去聲入聲混用の例あり。

左思蜀都賦

發節。偶。商。罰。月。坤。韻。偶。商。日。祭。發。罰。目。日。月。節。日。屑。

同 魏都賦

穴。龍。咽。穢。翳。噬。咽。脆。臺。髮。歲。藝。綴。勢。制。衛。絕。輶。坤。韻。穢。日。發。咽。咽。脆。臺。髮。勢。制。衛。日。祭。翳。日。霽。髮。日。月。龍。絕。輶。日。薛。穴。咽。臺。日。屑。

泰と曷末との去入兩聲の關係は、其の所屬の字にして、霽。沫。減。鈞。の如く、同字にして兩聲を有する者、又害の割に於ける最の撮に於ける奈の捺に於ける賴の懶に於けるが如き諸聲字の構造を見て、容易く悟ることを得べし。去聲の夫と入聲の黠鎋とを對照するに至りては、夫は其韻狭くして、双方の所屬の字より、十分其關係を推すこと能はず。去聲の廢も亦其韻狭けれど、入聲の月に對しては、廢の發に於ける夜の伐に於けるが如き關係を窺ふことと得べし。双方共に外轉に屬して、猶輕唇音を有するも、亦兩者近親の緣故を有する證と爲るべし。去聲の祭と入聲の

辭とは、泄。揭。說。綴。の如く、同字にして兩聲を有する者あり、又世の紐に於ける敬の體に於ける、紐の折に於ける、例の列に於けるが如く、韻聲字の相通する者ありて、兩者の間に、密接する關係あることを示す。
前の外、凡くより、他より入りて去聲にては、後世祭に屬すべき者と、同用を爲せる、翳。惠。屈。詣。庚。閉。の類あり、又入聲にては、後世辭に屬すべき者と、同用を爲せる、噎。咽。結。軼。設。別。の類あり。此等は陸韻にては、去聲の方日霽に入り、入聲の方日屑と組成せり。霽と屑との去入兩聲の關係は、その所屬の字にして、契。鬣。寃。閉。の如く、同字にして、兩聲を有する者あるのみならず、又替の體に於ける、契の楔に於ける、砌の切に於ける、戾の披に於けるが如く、諸聲字の構造も亦之を示す。霽屑の韻の去聲入聲所屬の字は、今來祭辭の韻所屬の者と異なる所ありとは、左の諸聲字の組織に徴して明かとなるべし。

醫 毆 穂 惠 旨 詣 淚 戾

互 姪 夷 缺 壹 睦 吉 響

歟 穴 失 軼 御 節 蓄 韻

時代既に遠く隔たり、隋唐の韻を以て、漢魏六朝の韻を糾するは、固より精確を期し難しと雖も、尚大體の上に於いて、其變遷に一瞥して、る法則あるを認め得へし。

元來入聲は四聲の一にして無尾韻に屬し、屢々他の三聲と往來し、分けて去聲と深き縁故を有し居りたるが、六朝の中期より、去聲と入聲とは次第に分離し、又入聲の語尾迄びて有尾韻に移り、陸韻にては、曷示は平聲、寒桓、上聲、旱、緩、去聲、翰、缺に對する、入聲、黠、鎋は平聲、山、刪、上聲、産、澁、去聲、襍、諫に對する、入聲、月、日、平聲、元、上聲、阮、去聲、願に對する、入聲、薛は平聲、仙、上聲、禡、去聲、線に對する、入聲、屑は平聲、先、上聲、銳、去聲、霰に對する、入聲として、分類せらるゝに在れり。

韻鏡にては之を並置すること左の如し。

外轉第二十一開

山元仙

產阮獮

禪體線

鎡月薛

同 第二十二合

山元仙

產阮獮

禪體線

鎡月薛

同 第二十三開

寒剛仙先

旱潛獮銑

翰譌線霰

焉古薛屑

第二十四合

恒剛仙先

緩潛獮銑

換譌線霰

未點薛屑

右の入聲の順序に従ひ、無尾韻として、此等の諸韻と、送り音脈を保てゝ、去聲の韻を排列して、第十三、第十四、第十五、第十六の諸韻の如き位置に改むれば、左の如き形と爲るべし。

外轉第十三開 第十四合 (去聲奇韻)

泰夫祭霽

(未點薛屑)

外轉第十五開第十六合(去聲奇韻)

發祭

(鑑月薛)

第十三第十四の兩轉の排列は、第二十三第二十四の兩轉に従ひ、第十五、第十六の兩轉の排列は、第二十一第二十二の兩轉に従ふものとす。二等韻の鑑に對する夫は省きて載せず。

別系に屬する霽を第四等に配するは、之と同系なる屑の入聲の四等にも當其位を占むるに従ふものなり。霽は平聲齊上聲霽に對する去聲にも當り、兩位を兼ねるものとす。屑に對する先銑霰も、李來仙獮線とは別系の韻にして、他より轉入して之と同用を爲し、而して彼其中より正しく分れ出でたる者多けれど、本論には、直接の關係薄きが故、煩を避けて之を詳説せず。

此一章は拙著「支那古韻史」より抜きたる別論とす。

大正十五年十二月一日印刷

大正十五年十二月十日發行

韻鏡新解全三冊

製本
實費
金貳圓貳拾錢

東京府荏原郡平塚町戸越二八二

著作兼發行

大島正健

東京市神田區北神保町二番地

印刷

佐藤齊一

東京市神田區今川小路三二七

賣捌

所 松雲堂書店